

浦賀文化

令和 2 年 (2020 年) 4 月 1 日

第 61 号

Email:uragabunka@yahoo.co.jp

観音崎公園 戦没船員の碑

戦時中には、商船や漁船などの民間船も軍に徴用されて輸送船などとして使われました。軍人以外にも、たいへん多くの船員が犠牲となっています。



船員ら約六万人を越える犠牲者の霊を慰めるために建立されました。

公園内では四季折々の花が楽しめます。六月の頃にはアジサイが咲き、特に、原種といわれるガクアジサイが至るところで見られます。

◆ ◆ ◆
「・・・眼下には、群青の浦賀水道が光る。甲板に白波のせ、船底を海中深く没して、タンカーが走る。残された一筋の航跡が美しい。周囲の林は、鬱蒼として陰い。

こんな近くに、これほど素晴らしい自然があるとは。まことにうれしい誤算だった。白い三角の石の壁には、戦没船員の霊を祀るという。屈折して伸びる鋭角的な純白の稜線に、船と海とをこよなく愛した人たちの高潔な気概を感じず。

紺碧の高い空、その空を抜く尖塔、遠く弧を描く水平線、深く濃い緑、ゆたかな自然に包まれて時を忘れ、しばし平静な心に浸る。」(山田勉・文)

横須賀風物百選より

◆ ◆ ◆

昭和四十四年(一九六九年)、このような報われることもなく眠る多くの海難犠牲者の霊を慰め、長く後世に伝えるとともに、海上平和の願いを込めて、日本殉職船員顕彰会が設立されました。その後、昭和四十六年には「戦没船員の碑」と呼ばれる慰霊碑が建立されました。碑文には、「安らかにねむれ わが友よ 波静かなれとこしえに」と刻まれています。毎年五月には全国各地から集まった遺族ら関係者により「戦没・殉職船員追悼式」が営まれ、献花台に白菊を手向けて平和と海難事故防止への誓いを新たにしています。

◆ ◆ ◆
また、付設の祈念碑として、建立当時の皇太子・同妃殿下(現在の上皇、上皇后)による歌碑のほか、船の錨、人魚とたわむれる青年の像などのモニュメントがあります。



人魚とたわむれる青年の像

例年六月には、横須賀観光協会主催の「戦没殉職船員忌俳句大会」が行われており、俳句愛好者が集い、多くの作品が発表されています。昨年六月八日の大会発表作品から一部をご紹介します。

魂眠る海茫茫と船員忌 昭子
初子

船員忌終夜を灯す溼標 榮一
初子

身を尽くし散りし御霊や船員忌 みさ子
榮一

紫陽花や幼き頃の手毬歌 久雄
昭子

能楽の奉納清し船員忌 昭
久雄

船員忌母呼ぶ声を託す波 豊
昭

ひと声は甲高き経青葉木兎 佳子
昭

安らかな母の胎内船員忌 千恵
昭

※昨年の台風15号、19号の影響により、園内には倒木被害がみられ、一部の道路に立入禁止箇所がありますのでご注意ください。

(芳賀久雄)

★参考文献

- ・横須賀市ホームページ 横須賀市
- ・よこすかの文化財 横須賀市教育委員会
- ・横須賀俳句協会会報 横須賀俳句協会
- ・公益財団法人日本殉職船員顕彰会ホームページ



歴史 語りい座 浦賀奉行所編 その十一

郷土史家 山本 詔一



●マリナー号来航●

嘉永二年（一八四九年）閏四月八日朝、城ヶ島沖を航行している異国船を漁師が見つけ、三崎にあった浦賀奉行所の出張所である御役宅へ届け出た。三崎役宅から報告をうけた浦賀奉行所は、三浦半島で警備にあ

たっている彦根・川越と房総半島側の警備をしている忍・会津の四藩へ異国船接近の一報を伝えた。そして奉行所からも見届け番船を出した。彦根藩、忍藩もすぐに警備船を出している。

異国船はイギリス海軍のマリナー号で、船の左右に六挺ずつと前方に一挺の大筒を備え、艦長のマゼソン中佐以下一〇名が乗り組んでいた。浦賀奉行所からの番船には、与力・同心とともにオランダ語の通詞が乗り込み、マリナー号へ向かった。マリナー号には林阿多（りんあとう）と名乗る日本語が話せる者がおり、奉行所の役人が質問する前に「お待さん、あなた方は江戸から来たのですか、浦賀のお役人ですか？」と尋ねて来たので、浦賀の役人である旨を伝えた。来航の目的は不足した薪水や食料の補給とのことであったが、彼らの真の目的は分からなかった。日本語が通用したことも影響したのであろうか、浦賀奉行所サイドは友

好的な態度を示し、マリナー号の希望通り千代ヶ崎沖まで引き船で曳航している。この停泊地にマゼソン艦長は、「今までに江戸湾に来航したどの外国船よりも、三マイルも前進した地点まで近づくことを許された。」と喜んでいる。

翌九日、与力・田中信吾らが通詞とともに再びマリナー号を訪れた。水や食料を差し入れ、退去を促したが一向に聞き入れられなかった。それだけでなく、久里浜沖にある「あしか島」周辺の測量をはじめ、ついには『あしか島』へ上陸して、スケッチまで始めた。これは彼らにとっては当然の行為であった。なぜなら、江戸湾および下田周辺を測量することが本来の目的の一つだからである。

奉行所は十日にも測量をやめて退去するよう促すが、マゼソン艦長は、阿多を通じて「浦賀奉行を私たちの船へ招待したい。そして私たちの上陸を許可して欲しい。」と奉行に会見を求めてくるありさまであった。

日本語の通訳の阿多について、「年齢は四〇才ぐらい、服装はイギリス服であるが、髪の毛は黒で肌や眼の色は日本人と異なるところがない。言葉も日本人の方言を話す者よりずっとわかりやすい。」との記録がある。この阿多という人物の正体は、実はモリソン号来航（一八三七年）時に、

漂流民として日本に送還されることになっていった尾張廻船・宝順丸の乗組員・音吉であった。モリソン号事件後の音吉は日本には戻らず、上海で日本人漂流民の保護活動をしていったという。

マゼソン艦長は「ウラガの人口は二万人で、帝国の首都の鍵であると思われる。江戸へ往来するあらゆる日本の船は、この税関を通過する必要がある、ここが独自の判断で操作すると首都の商業は完全に止まってしまうであろう。」と浦賀港の重要性を強調している。さらに「江戸にむかって十分に武装した蒸気船で航行を試みるべきであり、私が知り得たところでは、江戸の五マイル以内までは航行が可能である。」と報告している。

俳句の散歩道



奉行所の歴る三世紀年新た 大塚遊球子

奉行所のかまど跡つく初鴉 鈴木 ひろ

笑話一題

一年前、ご縁あって私は、この分館で働くことになり、その影響か、休日には資料館や昔のくらしを展示する民藝館に出かけるようになりました。

島根県大田市の石見銀山資料館では「井戸平左衛門」の紹介コーナーがありました。分館で井戸石見守のことを知ったばかりなのでこの二人の関係は？と興味を持ちましたが、活躍の時代は違うようで、こちらの井戸様は、さつま芋の栽培を奨励し、享保の飢饉から領民を救い、「いも代官」と呼ばれて親しまれたそうです。平左衛門ゆかりの井戸神社は、明治四四年に建設され、そこに渋沢栄一が金百円を寄付したそうです。渋沢も浦賀ゆかりの人と知ったので嬉しい発見でした。

後日、富岡製糸場を見学したら設立当時の三〇歳代の颯爽とした若い渋沢栄一の写真を見ることができました。旅先で出会う『小さなお宝探し』をしつくり楽しんでいきたいです。

なな丸

2020年は「浦賀奉行所 開設 300 周年」

今から300年前の享保5年(1720年)、伊豆下田から奉行所が浦賀へ移されました。浦賀奉行所は、船改めや海難救助、地方役所としての仕事を担うとともに異国船から江戸を守るための海防の最前線としての役割を果たしました。

